

911.3  
1  
下

一  
茶  
白  
集

下



一茶發句集下

秋之部



秋もや 隅の小隅の小松の

狗子有佛生

蝶もぬと 志々ぬ物う 仏う那

星々満のささやきあみんしき哉

聲も星ふいて 披風あきん 稲の古

娘も星の 披風をかきす 梅う那

子守る極樹のこころを握の葉よ

病中

うつろや藤子の宿は天の川

木も山へ流るはさうりまは川

こころあつし墓糸りして

鳥やては月ふるくを叶の露

糸のまや花を糸糸りの第一持

亡妻新盆

うらみもや母の墓にこころたたく

玉極や上望しつらきり〜氏

魂送

おこり極もとくおのこころよ仏蓮

精気のまゝを舞の月おれ

山里やあめのかうのと日延盆

るつらりとくあまや字角力

叶をを腮くたつや猪角力

極りや〜とまれたり負角力

極る形や二又あまの表の狩

稲妻やうつろひもえと〜

神花

秋風や州も角カとる男山

三井野のさ〜

焼風や礎ろふあ〜

病後

かま灯のや〜

さ〜女三十中

秋風やち〜

秋風の吹けと極ぬ小松北

玉露の露ろ〜

正見寺の上人十〜

あ〜〜

秋風やち〜

五十〜

あ〜〜

あ〜〜

あ〜〜

愛のちもや地獄の種をまきも着く  
志も愛のち津土集りのせらこ状  
よこりの〜生おりのりや州の露  
男女私あちきり〜おもさるふ  
途り〜を教訓〜

人 問ハる露とさきよ合点の  
おもさをきひ〜

吾後の世も愛の世あり〜去り〜  
愛のちもやとさよけ母子用紙〜

おのちもや海もはあかろ指と遠よ  
病入りのをまき〜指られきり〜  
浮世世のちよあ〜集り〜  
きり〜ひおろ〜

経堂

虫の尾を指〜〜知ひれ〜  
〜の〜の朝の桐花〜  
〜の〜の〜と帰婦の  
古知や世の〜の〜

水鏡の事いふを乃とんち

二百十日

世の中いふ事ふらう一軒の家  
此月世をたふさ乃とんち  
うとんち

甘く愛をせよとて進路はよ  
新築や人の心もさうある  
朝露の上のうらや 径山寺  
如くもあつてとてさうなる

兔灯を孫の山猫よとてさう

萩寺

萩の市伝ふ華をあり萩の花  
車も珠敷うけし萩あり萩の花  
入おの夢ありあり萩の花  
きりく萩とてとて萩の花  
むらさき色とてとて萩の花  
江戸川や舟結骨乃とんち  
名月や先ハありとてとて

明月の夜鏡の通りくろく歌

病中

明月やとらうりききあつしき

明月のさつとさつとさつとさつと

右 六十二章

希 杖 杖  
楚 江 杖

明月をみくられろとほ子哉

姥 持山

くろくくろくくろくくろくくろく

赤く笑

明月や解きも平をあのり出

飛 六川舟留

明月やほの指先の名あふ

るるるるるるるるるるるる

くろくくろくくろくくろくくろく

姉 持山くろくくろくくろく

くろくくろくくろくくろくくろく

月蝕

人あま月より先へ缺みなり  
あま月も穂ふりたるく三日は月  
涼川や堀きくはり 秋は月

春耕孫祝

門の月ささる男おのつとみ終  
聖のねは月を待たふ幕は  
照くはく月うさひあり 隔田川  
秋の原知くくあんそうくき

秋日和とも思をまふは又式

あくくはまのちくや妹日和

母のあまのれ遠ひあくく

まふふるやあつふはくく秋の暮

病後

急い危つと活く所く秋のくれ  
中くく人とまれく 妹はるる

八月二十九日長光寺詣

本堂の程に長光寺乃舊友



されりきし月二十日宿と  
 ありきく阿のりききりたのハ  
 三十年ノ路のたききりん  
 おのき被地ふとととりのて  
 編のきのきひきくきひのい  
 ちのきききききききき  
 きのりききききききき  
 ーきききききききき  
 きのききききききき

道程をききききききき  
 け世あききききききき  
 ちのききききききき  
 かりきききききき  
 迎はきののきききききき  
 ちのききききききき  
 六十あききききききき  
 あきききききききき

美僧の庵面子

新法師ふ所よ秋をこのもいふら

松

一人を帳面ふはく秋をこの

草の影もあつて代を以て秋をこの

豊秋

二軒の影や二軒餅はく秋のる

外う浪

うつら日本のはるそらくもあつ

松のあつら

厚の影やあそれ今幸と行月見

白川やあり春とく天伴の

田の影や里のく影をこのも感

地を以てくともあつらひ水田のる

天は厚影あつらひ秋ふり秋のぬえ

秋夕や岸のあつらひの門馴る

立影の今あつらひ秋のぬえ

夢醒らくもあつらひ秋の富よ入

燈も入室をのりてよ 純古希  
と花自花 兼おむつまや  
あまのつや 深ふの露をを好む  
るささや 花も意路も迷ふ  
くあゆとんや 舟も田舎の  
羊穀りあふくちあんま  
わささささささささささ  
さささささささささ

日本のあう深まて 花穂花

花人の垣根ふささささささ  
あまのつや あれみあとかささ  
人からささあ あまのつや  
花穂花や 細さささささ  
ささ正風院はあまの白花あり  
門あさささや 下戸あささ  
大業や 今さささささ  
花さささ 大ささささ  
あさささ ささささ



あふみあふみあふみ

象味の松猫 / 遠く風の中の

きりぎりす / きりぎりす

あふみ

山のふもと / 草のふもと

秋の夜 / 静かなる夜

空の程 / 遠くをゆく

まげや / 徳助化入

九月

あふみあふみあふみ

右

六十四章

雲士

掬斗 校

冬之部

かたあゝく 輝きまされ初志これ  
あゝ輝の才なきはあゝり初時  
初時自夕版 雲ふおこりり  
目さけ 歌き 新改よまの志これ

旅

あゝく や家あゝあゝ初志これ

業名

懐のつひおろりや夕しこれ

途中まき素玩ふ遊ふ

志これ込め角りり二軒目乃菴  
秋志これやう 峰きれ 初んま坊  
くのお志これ 世を以佛り形

悼

あゝ馬あんあ志これのあゝんま

遊人 世のうたふ 隠きく 結

られし

業のなる民を巡るやあつ時  
業のなる民を巡るやあつ時  
業のなる民を巡るやあつ時  
業のなる民を巡るやあつ時  
業のなる民を巡るやあつ時

桃青靈社

此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初

此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初

春日山

此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初

橋上乞食

此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初

追分

此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初  
此の靈社ふうけある初

栗栝や新吉あるも小敷並

一人松

次のらた灯て燈あつくくさくか  
と〜〜〜〜〜とあまれ〜〜〜〜  
出せの柿小嶋年のかく家  
か〜〜〜ののたまのむま〜  
よまのゆあ〜り住徒〜  
く〜あせ〜く〜あや坊の舞の  
それあつ小栝〜せ〜あ〜あ〜

栗のふゆ〜秋あ〜ち坊の

ち〜あ〜し〜菜の屋〜あ〜

このあ〜あ〜る〜あ〜のた福

あ〜〜と〜あ〜ぬ〜必〜あ〜あ

あ〜あ〜〜餅〜あ〜あ〜あ〜

料〜あ〜ん〜壁〜あ〜七福神あ

あ〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜大根江連と〜あ



一の... 同様に...  
 美...  
 横...  
 ま...  
 え...  
 こ...  
 か...  
 撫...  
 給...

おのり

男... 弟...

... 乙...

賀田家大川氏

本... 末...

あ... 一...

ま... 一...

水... 一...

磯... 村...

抄り集りて日向を解く一少傍り  
首を垂して三月ころの地根は

花鋤委地無人収

思ひ付思ふぬ針も枯ゆり  
枯を考へ海へ鬼あつことと  
ぬりゆふあんの周集を枯ゆり  
大根引大根く是ささ入り  
雑るゆも粗ゆふり大根引  
鳴き雀其大根も今引一と

か開やつてく通り表の白  
新勝ふさあく一炭のさかん  
分るやも博もあきぬおるり炭  
炭のゆふ炭の粗ゆ通ひり  
炭のゆふ月夜鳥鳴ゆり  
櫛のゆふうらむけり空海  
櫛の中や目出なは代の表と表  
松  
形もゆも象を燈てんありの

碓氷

もや〜と催冬〜の細〜

飯菴

當〜れもそれあり〜冬菴

小人閑居成不善

冬菴 悪〜の客のほ〜り

〜種〜柳の陰を冬菴

眠り極端〜習ん〜

西の本と夢〜のむ〜

ちせ後嫁先おむあつた〜  
加〜のあ〜紙子とあ〜

大坂の朝霧

あ〜と〜と〜と〜

宿成り〜ん引〜

今少房を〜建〜ん〜

海とのら〜と〜

三日夜と府を〜細代也

細代也〜と〜

細代も馬をとり揃はるといふ事の

とていふ事一はちかちかといふ事海に

くはれく海を埋め甘満とて

ゆつと海にうたつていふ事

若くともいふ事いふ事いふ事

とていふ事いふ事いふ事

象つこの<sup>カネ</sup>を揃へていふ事

此地の海と白首といふ事いふ事

扱ちつとていふ事いふ事いふ事

海も福を待つていふ事

とていふ事いふ事いふ事

船をかへていふ事いふ事

門の中をいふ事いふ事

一とていふ事いふ事

盛任りていふ事いふ事

初冬や徳の上九少り焼

とていふ事いふ事いふ事

初冬やとていふ事いふ事



一 概々不出身なりありては佛  
字々佛々をさき立てありしに  
此々人々やまゝとてのさ  
るるのあらん所り 年々若若  
とてかゝるも任せぬとのれ  
きりもや七尺をこゝ小せきり  
夕日や血媒の色とて若若さ  
念々相續  
佛のさやけふ年々を捨りて

節分

福豆やまゝ揚子や葉ふたをぬ  
あゝまゝかや葉のさゝりて福ハ内  
餅志のま陰ふてさちちとてけ  
神の灯や餅をさきまふ餅をさ  
家門へまゝさゝり配り降  
まんとてさゝりまゝとてさ

長崎

若くやまゝ人々若く年々若

雜

おのつゝちりりあり新路山  
掃後へ露のりりるを利路の露  
序ふや四十九年のむくおち  
露のまねる代も一日あつたうぬ  
佛ともあつてうりく巻の松  
牧人七十人  
きこく佛の巻もちひと

琵琶湖

う海とりのつものもを富まのふ

天下泰平

おのほふ病も巻よふり余州は

右百六章

文虎校

春甫

新葉花の夕暮しのほろろ  
しづかのうらみそほろろ

世の中をかくるをたれぬ  
夢をささぐるをたれぬ

かきくは梅をば  
あはれ

古昔の人のあはれ  
を

く

例

う

う

う

う

功成身退

里

若

七





月を二宮のやうな花枝さみは月夜思  
表裏はゆるがる車の輪はゆるりと  
しるべし乃こそとて我もむしあれ歌師は  
能く神を曉し生涯を自然に任せ  
きしにゆるぎぬて夏の夜をまう  
まゝのちさやく我徒一人くきとて  
ほしよとてさうとてさうとてさうと  
ちりちりちりちりちりちりちり  
さうとてさうとてさうとてさうと

ワタシもやどにれのちりちりちりちり  
さうとてさうとてさうとてさうと  
風の音をさうとてさうとてさうと  
らふ瀬うも残のうちもやひさくれえ  
されさうとてさうとてさうとてさうと  
おしは丘おころぬちりちりちり  
回しは丘おころぬちりちりちり  
おのちりちりちりちりちりちり  
さうとてさうとてさうとてさうと



ふ市の星えんせふらにえあやう形御の

時の日記やうあるりの價もくく紙を求

なましはく何と愛ひろひまきくこの

あまの星とあやうとあうたうくみや

くまきくまや

まぬ十ちまうり二とをとくくくのみ

秘洲寺のゆゆ 某志とく

*Faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.*

明治卅五年十一月 購版  
明治卅六年六月廿五日發行

一茶句集奥附

正價金貳拾五錢

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷景長

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

佳客期  
茶相集  
香板須  
蘇天九

